

平成 29 年 8 月 14 日

皆さまへ

東京学芸大学名誉教授、目白大学客員研究員 松矢勝宏

拝啓 残暑お見舞い申し上げます。お元気でお過ごしでしょうか。

私どもが皆さまのご理解をいただきながら立ち上げた障害者就業支援研究会が、東京都に認可され、NPO 法人障害者生活支援開発センター Green Work 21 として活動を始め、この 10 月で 15 周年を迎えることとなります。今回の平成 29 年度第 2 回障害者就業支援研究会は、その記念の意義を重ねて開催します。

この活動には前史があります。故東京学芸大学名誉教授の大井清吉先生と私の研究室にそれぞれ進路指導を研究テーマとする内地留学の現職教員を迎えることになりました。そこで語り合いが始まりました。東京学芸大学の附属養護学校の先生方と多摩地域の進路指導の先生（多摩障害児教育研究会、略称、多摩障研）たちの協力をえて、養護学校進路指導研究会（略称、進路研）を立ち上げ上げたのです。1993 年のことでした。

この年、すなわち年度の始まる 4 月には、国連障害者の 10 年が終わり、新しくアジア太平洋障害者の 10 年が始まったのです。知的障がいのある生徒たちの本人主体を尊重した進路指導、すなわち本人の進路学習を前面に推しだした進路支援と社会参加、さらには生徒の主体性を尊重した進路支援と職業教育の一体的な改革という新しい実践研究がスタートしたのです。都道府県への呼びかけとしては、国立大学附属養護学校をセンターとして広く国公立知的障害養護学校に呼びかけ、「大学公開講座 進路学習と社会参加」を東京学芸大学で開催しました。さらに 1995 年から養護学校卒業生本人を参加対象にする実験的な生涯学習支援、大学公開講座「自分を知り社会を学ぶ」が進路研の実践研究として始まりました。このような実践研究に裏打ちされ、生徒の主体性に基づく社会参加への個別移行支援計画の策定というキーワードが醸成されました。

おりしも東京都知的障害養護学校校長会のもとに東京都知的障害就業促進協議会（進路指導担当教員の連絡・研究協議会）が発足し、進路研メンバーが公的な立場で貢献する機会に恵まれま

した。ここで提言された「個別の移行計画と策定と実施」の内容は、特殊学校校長会（当時）に引き継がれ、文部科学省の助成研究により「個別の教育支援計画の策定と実施」の研究として継承され、間もなく国の基本計画に採用されることになりました。

このような活動が軌道に乗るためには、いくつかの環境条件（因子）に恵まれたことがあります。一つには知的障害者を受け入れた特例子会社による「障害者の雇用を楽しく考える会」（略称、楽障会）や神奈川県における同じく特例子会社を中心に立ち上がった NPO 法人「雇用部会」が進路研の大学公開講座等に対して積極的に協力してくださったこと、厚生労働省の障害者雇用対策課の調査官や関係支援機関・団体のワーカーからの支援が常にあったことです。

進路研は進路指導に関する研究会と本人講座「自分を知り社会を学ぶ」の講座活動案を作成する研究会をあわせて月 2 回、60 名から 80 名の参加をえるという長年の活動の蓄積がありました。進路指導担当の先生たちが業務終了後に三々五々あつまり、大学の正門が閉まる深夜の 12 時まで熱い討論を交わした活動の蓄積、その思いを大切にスタートした組織が障害者就業支援研究会です。私の東京学芸大学定年退職をひかえて、活動のネットワークを存続していくことをも踏まえた新しい一歩でした。いろいろな思い出が走馬灯のように映し出されます。今は東京都教育委員会と厚生労働省東京労働局とのコラボによる毎年の行事になっていますが、「企業セミナー」の開催について NPO 法人認可前の障害者就業支援研究会として東京労働局に後援名義の申請をし、「無認可団体」という理由で申請を認められなかったことがありました。懐かしい思い出ですが、NPO 法人の認可申請をはじめの大きな動機になりました。

このように振り返りますと、今回の 15 周年は進路研の前史を加えて四半世紀の歴史の到達点にある、ということが出来ます。私事にわたり恐縮ですが、自分史的な思いが重なってくるのです。この 9 月 5 日で満 77 歳になります。これからも生涯現役として与えられた仕事を全うしたいと念じ活動をしてまいります。元気なうちにぜひ皆さまとお会いしたいと思います。どうか、万障お繰り合わせくださり、またお知り合いの方々にもお誘いくださいませ、ぜひご出席くださいますようお願い申し上げます。